

音楽科

中村 恵美子・甫出 頼之

1 研究主題との関連について

スワニック（2004）は、音楽について、「人間という種族の歴史と同じくらいに古い歴史を持つ対話の様式であり、自分自身や他の人々に関する考え方を、鳴り響く形式の中で明確に表現する手段」であり、「対話として、私たちの自分自身についての理解や、私たちを取り巻いている世界について理解を深め、人生をより豊かにしてくれるという、重要な役割」を果たす、いわば、「私たちが知る、考える、感じるための一つの方法」であると述べている。

日本における音楽科教育は、德育や啓蒙といった「音楽外の効能」や生徒指導や学校行事といった「学校儀礼に果たす役割」によって正当化される歴史を辿ってきた。しかし、これは「教科としての音楽を無用化する論拠」にもなり得る。「教科としての音楽」の意義を深めるには、音楽科教育の本来の働きを意識した教育を考える必要があると言えよう。このことについて、今井（2019）は、音楽を通して様々な知の世界とつながり、考え感じることによって、自己を省察し、変容させることだと述べている。つまり、音楽科教育には、音楽と関連する文化的・社会的・歴史的な知識の探究と、音楽的経験から得られた思考や感情の振り返りによる自己理解と成長を促すことが求められていると考えられるのである。

以上を踏まえ、音楽科では、「音楽をとおして、世界をより深く理解するとともに、人生を豊かにすること」を「音楽科本来の魅力」と捉え、児童・生徒がこれまでに積み重ねてきた音楽的な経験、新しく経験する音楽をもとに、自分自身や他者と対話をしながら音楽について思考し理解を深め、その価値を自ら見つける学習活動を大切にしたいと考えている。

2 本年度の研究計画

（1）研究の目的

本研究の目的は、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」とはどのようなものかを検討することである。そのために、広島大学附属東雲小学校・中学校では、令和4年度より、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」を「授業構想力」「授業実践力」「授業分析・評価力」の3つのカテゴリーに基づいて規定し、授業実践を通して、規定した資質能力の妥当性について検証してきた。

（2）研究の経緯（昨年度の成果と課題）

2年目となる昨年度、音楽科では、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」の3つのカテゴリーについて、それぞれ、表1のように設定し、小学校および中学校の授業実践を通して、それらの妥当性を検討した。

【表1】教師の資質能力（音楽科）

資質能力	教科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	<ul style="list-style-type: none">・児童・生徒がこれまで親しんできた音楽や音楽的な経験や体験を基盤としつつ、未知・未習の内容に取り組む意欲を促す目標を設定する力。・音楽や音楽文化のもつ本質的な価値を捉え、児童・生徒に付けたい資質・能力と関わらせた教材を開発する力。
授業実践力	<ul style="list-style-type: none">・楽器の演奏や歌唱といった音楽表現の技能を高めるために必要な表現の技能。・指揮と指示、ノンバーバルな働きかけといった指導技術。・「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実し「主体的・対話的な授業」を行うために必要な、ICT機器等の活用能力。
授業分析・評価力	<ul style="list-style-type: none">・瞬間的に児童・生徒の演奏表現を捉える力。・授業実践を省察し、実践的知識を更新する力。

表1の妥当性を検討するため、小学校・中学校それぞれで、以下のような授業実践および検討を行っ

た。

小学校音楽科においては、「授業構想力」で規定した、「音楽や音楽文化のもつ本質的な価値を捉え、児童・生徒に付けたい資質・能力と関わらせた教材開発」に着目し、諸外国の楽器の固有な音色や響きの特性に気付き、演奏の工夫をすることを通して、思いや意図にあった音楽表現ができるような授業を構想し検証した。1オクターブ8音色のアンクルンを2セット用いて、1台の楽器を1人が担当し、竹自体の振動による音色の面白さや竹素材楽器の響きの心地よさを味わいながら、インドネシアの文化や価値観に対する理解ができるように配慮した。また、東南アジアと日本の竹素材楽器の音色をICT機器で調べみたり、竹素材に関連した東南アジアのバンブーダンスを学習に取り入れたりした。さらに、協働しながら音をつなぎ合わせて曲を作り上げる過程を大切にする時間を十分に保障した。結果、国や地域における文化の違いや価値観を音楽・楽器・演奏方法を学習しながら受容することができ、アンクルン演奏にふさわしい表現を工夫する学習展開につながった。

この実践においては、とりわけ「授業構想力」の「音楽や音楽文化のもつ本質的な価値を捉え、児童・生徒に付けたい資質・能力と関わらせた教材開発」が重要な役割を果たしたと考えられる。課題として、諸外国の音楽の良さをより一層味わうことができるために、児童の身近にある音具や素材から、それらにゆかりのある国や地域に目を向け、文化や価値観の違いを受容しながら伝統音楽に親しむことのできる授業開発が必要であると考えた。

中学校音楽科においては、「授業実践力」の中で規定した「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実し『主体的・対話的な授業』を行うために必要な、ICT機器等の活用能力」に注目し検証した。具体的には、音楽を鑑賞する際、タブレット端末とヘッドホン、ヘッドホン同士をつなぐイヤフォン・スピリッターを使用し、グループのメンバーのみで音を共有して活動する授業実践を行い、ICT機器を効果的に使った「教科等本来の魅力」に迫る授業づくりに取り組んだ。ICT機器を使うことによって、自分たちのグループの音だけに集中して音楽を鑑賞する活動を行い、生徒同士が「対話をすることをとおして」音楽的な気づきや感想を共有し、知識や感性を深めることができた。

のことから、この実践においては、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実し「主体的・対話的な授業」を行うために必要な、ICT機器等の活用能力の妥当性が認められた。課題として、世界をより深く理解するとともに、人生を豊かにするという音楽科本来の魅力により迫るために、音楽を鑑賞するだけではなく、鑑賞活動に歌唱や演奏などを取り入れ、実際に体験・体感して学ぶ授業構想が必要であることを挙げた。また、ICT機器の活用により生徒同士が共有した数多くの知識や感性を教師が的確に捉え、それをクラス全体に伝える「授業分析・評価力」が必要であると考えた。

以上が昨年度の授業実践をとおした検討内容である。

(3) 今年度の研究概要

昨年度の成果と課題をふまえ、3年目となる今年度の「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」には、新たに2つの項目を設けた。1つは、(1)で述べた、児童の身近にある音具や素材から、それらにゆかりのある国や地域に目を向け、文化や価値観の違いを受容しながら伝統音楽に親しむことのできる授業開発が必要であるという課題をふまえ、「音楽を通して様々な知の世界とつなげる柔軟な発想力。」を加えた。2つ目は、(1)で述べた、生徒同士が共有した数多くの知識や感性を教師が的確に捉え、それをクラス全体に伝える力が必要であると考えたことから、「児童・生徒同士が共有した数多くの知識や感性を教師が的確に捉え、それをクラス全体に伝える力。」を加えた。以上2点を加えたものが表2である。

【表2】今年度加えた教師の資質能力（音楽科）

資質能力	教科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・音楽を通して様々な知の世界とつなげる柔軟な発想力。
授業実践力	変更なし
授業分析・評価力	・児童・生徒同士が共有した数多くの知識や感性を教師が的確に捉え、それをクラス全体に伝える力。

本年度の研究では、はじめに、規定した「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」に基づいた授業を小・中学校それぞれで構想・実践する。次に、実践した授業において映像記録を基にした演奏・奏法の工夫・発話記録・授業後の振り返りから分析を行い、「音楽科本来の魅力」を踏まえた目標を、児童・生徒が達成することができたか、を検証し、規定した「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」表1と表2の妥当性を検討する。

【引用・参考文献】

- スワニック、キース (2004), 『音楽の教え方 音楽的な音楽教育のために』 塩原麻里・高須一共訳, 音楽之友社
- 今井康雄 (2019), 「学校教育と音楽 なぜ学校で音楽を教えるのか」, 日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』 音楽之友社, 26-27.
- 田中里佳 (2019), 「音楽科を担う教師の「高度な実践力」とは何か—先行研究の検討からの考察」, 『音楽教育実践ジャーナル』 vol.17, 16-25.
- 中央教育審議会 (2021), 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」, インターネット. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm. (2024/10/29 にアクセス)
- 文部科学省(2018a), 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 東洋館出版社
- 文部科学省(2018b), 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社